

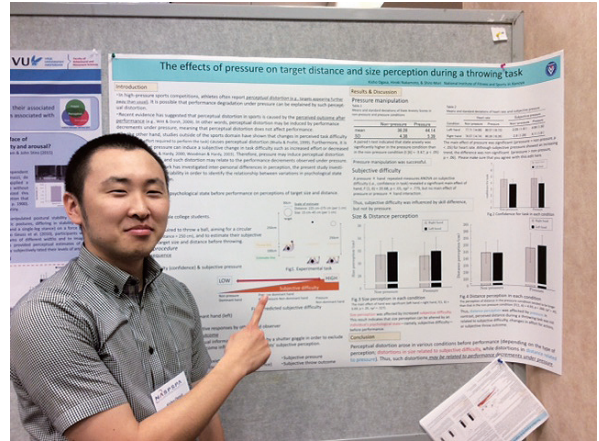
平成28年度重点プロジェクト事業（海外派遣研究員旅費）報告

北米スポーツ心理学会における研究発表

小笠 希将*

はじめに

平成28年度重点プロジェクト事業（海外派遣研究員旅費）の助成により、平成28年6月15日から6月18日までの日程で、カナダのモントリオールにて開催された北米スポーツ心理学会（North American Society for the Psychology of Sport and Physical Activity：以下、NASPSPA と略す）に参加し、我々がこれまでに行ってきた研究成果の一部を発表する機会を頂いた。本稿では、学会大会の様子および筆者の発表内容について報告する。



ポスター発表の様子

NASPSPA について

当学会は、発達、学習および制御などの運動行動を対象としたスポーツおよび運動心理学領域における研究の発展を目的とした組織である。学会員はアメリカやカナダを活動拠点としている研究者や大学院生が多く、筆者のような学生は同じような立場の人と交流する機会が多く得られることが特徴である。また、学会大会には、アメリカやカナダのみならず、アジア、ヨーロッパ、オセアニアなど、世界中から研究成果を発表するために多くの研究者が参加している。学会の活動としては、学会大会が毎年6月の中旬にアメリカもしくはカナダの各地で行われており、来年には50周年を迎える歴史の長い大会である。この他には、The Journal of Sport & Exercise Psychology (JSEP) と The Journal of Motor Learning and Development (JMLD) といった2つの学会誌の発行を行っている。

学会大会の概要

学会大会は、主となる3日間のプログラムと事

前のプログラムに分かれている。大会の内容としては、全体セッションとテーマ別の個別セッション、そしてポスターセッションが行われ、会期中は、8:00から18:00までこれら3つのセッションが行われている。また、18:00以降も情報を交換する場が設けられており、研究の内容のみならず、語学力の向上に大いに役立った。今回の大会において、全体的に話題に上がっていたトピックは、「インターナルフォーカスとエクスターナルフォーカス」と「autonomy support (自律性支援)」の2つであった。これらの研究は、前回大会で学会長をしており、今回大会の責任者の一人であった Gabriele Wulf 氏のテーマでもある。今回の大会に参加することで、こういった研究の流行を知ることができたことも大きな収穫の1つであった。

研究発表の概要

プレッシャーのかかる試合において、スポーツ選手が報告する現象の1つに知覚の歪み（例えば、的が遠くに見える）があるが、プレッシャー

* 鹿屋体育大学大学院体育学研究科博士後期課程2年

によって運動を行う前に知覚が歪み、パフォーマンスに影響を及ぼしているのかについて明らかにした研究はない。近年のスポーツ領域以外の研究では、知覚を歪める要因として主観的な困難性の変化が挙げられている。一方で、プレッシャーに焦点を当てた研究では、プレッシャーが課題遂行に対する主観的困難性の変化を引き起こすことが報告されている。以上のことから、本研究ではプレッシャーが課題に対する主観的な困難性の変化を引き起こし、課題遂行前の知覚（対象の大きさと距離の知覚）が変化するのかを明らかにすることを目的とした。結果として、主観的困難性（課題に対する自信）はプレッシャーによって変化しなかったが、距離の知覚のみプレッシャーによって変化する可能性が示された。

筆者は、NASPSPAの1日目に開催されるポスターセッションにおいて、上述した内容の（タイトル：“The effects of pressure on target distance and size perception during a throwing task”）発表を行った。このセッションでは、発表時間が2時間設けられており、自由に討論ができるスタイルである。発表では、自分のとなりが有名な研究者であり、自分の内容とも似ていたことから多くの研究者にポスターを見ていただいた。質問はプレッシャーの内容に関する事が多く、言葉の定義などについても聞かれた。こういった内容の質問は、日本の学会発表や論文で指摘される点であり、日本と同様の質問を受けたことで自分の研究の重要な点を再認識することが出来た。しかしながら、あまり細かい内容を討論することができなかったので、細かい点についても討論できるように語学力を向上させておく必要性を感じた。

おわりに

今回の国際学会における発表は、筆者にとって初めての経験であり、自身の研究のみならず、語学力などの自身の能力を見つめなおす良い機会になった。特にポスターを見に来ていただいた研究者に、語学力を理由に話しかけることが出来な

かった事が大きな心残りである。今後は、こういった貴重な機会を生かし、研究活動をより充実したものにしていくために、自分の能力の向上に励んでいきたい

最後に、今回の国際学会での発表は、本学教職員及び共同研究者の皆様のご支援やご協力、海外派遣研究員旅費の採択が無ければ間違いなく不可能であったといえる。このような素晴らしい機会を与えてくださった皆様にこの場を借りて深く感謝を申し上げたい。